

# 資質・能力の育成を目ざした教育課程の開発過程

## －上越教育大学附属中学校の研究開発事例を中心に－

鴨井 淳一\*・濁川 朋也\*\*・釜田 聡\*\*\*

(平成29年10月10日受付；平成29年12月7日受理)

### 要 旨

本研究は、上越教育大学附属中学校が2015年度から取り組んでいる教育課程の研究開発に着目し、中学校における資質・能力の育成を目ざした教育課程の開発過程を整理し、その要点を抽出することを目的とする。

本研究では、上越教育大学附属中学校の教育課程開発の系譜と2015年度から2017年度までの教育課程の開発研究の関係について整理した。その結果、次の手順で教育課程の研究開発が行われていることが明らかになった。

- 1 時代や社会の要請を的確にとらえ、上越教育大学附属中学校の研究系譜に位置付けつつ研究開発に着手した。
- 2 「これからの社会を創造する人材」「歩むべき正しい道を自ら切り拓く人材」の育成を目ざした。
- 3 関係法令や各種先行研究を参考にして、6つの資質・能力（アビリティ）を設定した。
- 4 グローバル人材育成科を教育課程に位置付け、6つのアビリティを育成・評価する要の時間とした。
- 5 現在（2017年度）は、6つのアビリティの評価システムを構築し、その運用に努めている。

一方で、課題として、6つのアビリティについて、各教科等で育まれたアビリティとグローバル人材育成科で確認されたアビリティの往還関係を明らかにすることを指摘した。

### KEY WORDS

資質・能力の育成 Competency Development

教育課程の開発 Development of Curriculum

上越教育大学附属中学校 Junior High School Joetsu University of Education

## 1 研究の背景

本研究課題設定の理由は、次の2点である。

1点目は、上越教育大学附属中学校の研究経緯とその特質である。2点目は、中学校における資質・能力の育成を目ざした教育課程の開発研究の意義である。以下、順に説明する。

### 1. 1 上越教育大学附属中学校の研究経緯とその特質

小出・濁川・中野・釜田（2016）は、上越教育大学附属中学校の研究経緯について、次のような特色があることを明らかにした。

- ・上越教育大学附属中学校の研究経緯は、1990年代に一つの節目を迎え、教育課程研究に大きく舵を切った。
- ・上越教育大学附属中学校は、1995年から教育課程の開発研究に着手し、今日の継続的な教育課程開発研究に継承されている。
- ・教科担任制である中学校教育において、長期にわたって教育課程の開発研究を行っている学校は少ない。

以上のことから、上越教育大学附属中学校の教育課程開発のあゆみは高く評価すべきと述べている。

具体的には、「中学校段階で、こうした実践的な教育課程開発研究を継続している例は管見する限り見られない。そうした中で、上越教育大学附属中学校は注目すべき教育課程の開発研究を継続的に行っている。また、1992年から教育課程研究、1995年から教育課程の開発研究に取り組み、その間、三回にわたって文部科学省の研究開発校の指定を受け、実践的・開発的な教育課程研究を推進してきている」と指摘した。とかく教科教育や学級活動、道徳教育等など、特定の教育活動に特化した研究が中心になりがちな中学校教育では注目すべき研究開発校といえる。

\*上越教育大学附属中学校 \*\*上越市立城北中学校 \*\*\*学校教育学系

## 1. 2 中学校における資質・能力の育成を目ざした教育課程開発の意義

平成29年3月31日付（号外第70号）の官報で、新学習指導要領が文部科学省告示として公示された<sup>1)</sup>。その中で、「幼稚園教育要領，小中学校学習指導要領の改訂のポイント<sup>2)</sup>」として，次のポイントが示された。

1. 今回の改訂の基本的な考え方
2. 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」
3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立
4. 教育内容の主な改善事項

上記の1～4のすべてが，本研究（上越教育大学附属中学校の教育課程の研究開発）に関わるものであるが，特に次の2点に注目したい。

一つは，「2. 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」」の中で指摘されている「これからの時代に求められる資質・能力を育てていくこと」である。いわゆるコンテンツ重視からコンピテンシーベース重視への転換を求めた。「何ができるようになるか」を明確に求めている。

二つ目は，「3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立」である。ここでは，資質・能力の育成のため，教科横断的な学習を重視している。具体的には，教科内容の再構成や時間割の弾力的な運用など，根本的な対応策が求められる。つまり，各学校で資質・能力の育成を中核とした教育課程の編成を行う。そのために「主体的・対話的で深い学び」を推奨する。また，「学校全体として，教育内容や時間の適切な配分，必要な人的・物的体制の確保，実施状況に基づく改善などを通して，教育課程に基づく教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図るカリキュラムマネジメントを確立<sup>3)</sup>」すべきことが述べられている。

実は，これらの指摘はすでに上越教育大学附属中学校の研究開発の過程にすべて組み込まれているのである。このことは，上越教育大学附属中学校の先行研究で明らかにされてきた<sup>4)</sup>。さらに，上越教育大学附属中学校は，2015年度から「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒の育成－グローバル人材育成科の創設と6つの資質・能力－」と研究主題を設定し，教育課程の開発研究に取り組んでいる。

これらの上越教育大学附属中学校の教育課程研究開発の潮流を踏まえ，現在取り組んでいる教育課程の研究開発の概要を丁寧に整理し，その要点を抽出することは，新しい学習指導要領の趣旨に合致した中学校の教育課程の編成に寄与するものと考ええる。

以上のことから，本研究題目を「資質・能力の育成を目ざした教育課程の開発過程－上越教育大学附属中学校の研究開発事例を中心に－」と設定し，次の研究の目的と研究の方法を構想した。

## 2 研究の目的と方法

### 2. 1 研究の目的

本研究の目的は，上越教育大学附属中学校が2015年度から取り組んでいる教育課程の研究開発に着目し，資質・能力の育成を目指した教育課程の開発過程を明らかにすることである。

### 2. 2 研究の方法

最初に，上越教育大学附属中学校の教育課程開発の系譜を整理確認し，次に2015年度から2016年度にかけての教育課程開発の経緯，続いて，2017年度の教育課程の開発研究の現状について整理する。最後に，2015年度から2017年度の研究開発の経緯を概観し，資質・能力の育成を目指した教育課程の開発過程を明らかにする。

本研究は，2015年度から2017年度に上越教育大学附属中学校が発刊した次の研究出版物を研究対象とした。

- ・研究紀要
- ・研究会指導案
- ・研究開発学校の報告書
- ・研究会議録

その他，必要に応じて，過去の上越教育大学附属中学校の研究紀要や関連する先行研究を収集し，参考とした。

なお，本研究論文の分担は次の通りである。

2015年度・2016年度の研究開発の経緯や教育課程の構造は主に濁川が執筆した。2015年度・2016年度の研究紀要

を中心に、研究開発報告書や各種授業案、研究会議記録等を参考にして、改めて執筆したものである。

2017年度の取組の部分は鴨井が執筆した。2015年度と2016年度の研究開発の成果と課題を受け、2017年度の評価活動について、現在進行中の研究開発の要点について執筆した。研究全体の構成と研究の総括は釜田が担当した<sup>5)</sup>。

### 3 研究の結果

#### －上越教育大学附属中学校の教育課程の開発の現状と課題－

#### 3. 1 研究開発の経緯（2015年度～2016年度）

##### 3. 1. 1 研究の背景

少子高齢社会の到来により、日本の社会構造が著しく変化してきている。また、地球温暖化問題や国際紛争など、利害関係を越えた国際協調の必要性が高まっている。さらに、グローバル化の進展により世界は身近になり、各国が独自に抱える問題や課題も自国だけでは解決できない状況になっていきている。既存の課題だけではなく、今後新たに生じる課題に対しても、地域や国内、国外に広く目を向け、多様な他者と協働しなければ、解決は望めない状況にあるといえる。

このような背景から、社会に適応するだけではなく、「これからの社会を創造する人材」が必要であり、様々な変化がおこる時代だからこそ人としての在り方を重視し、「歩むべき正しい道を自ら切り拓く人材」が必要であると捉え、その人材育成を目指した教育課程の開発に着手した。

##### 3. 1. 2 研究仮説

「グローバル人材育成科」を創設し、各教科と両輪でこれからの社会で求められる資質・能力を育成する教育課程を編成することで、研究主題「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育むことができる。

##### 3. 1. 3 研究の構造

「持続可能な社会を創造すること」とは、これからの社会に適応するのではなく、地域や世界の実態に目を向け、未来の社会を自ら創り上げることである。「自己を確立できること」とは、様々な経験を通して、自らを客観的に見つめ、正しく行動できることである。この「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を「グローバル人材」とし、新設教科「グローバル人材育成科」を創設し、新たな教育課程を編成した。これからの社会で求められる資質・能力（以下、アビリティ<sup>6)</sup>）について、既存の課題や新たに生じる課題などと照らし合わせ、文部科学省中央教育審議会や国立教育政策研究所、Microsoft、日本ユネスコ国内委員会の報告書等を基に、【情報統合力】【代替思考力】【企画創造力】【主体的実践力】【コミュニケーション力】【コラボレーション力】の6つに整理した。

これらアビリティは、E S Dで育成が求められている7つの能力態度「批判的に考える力」「未来像を予測して計画する力」「多面的総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」をすべて包含している。

- ・【情報統合力】課題や目的に応じて、必要な情報を集め、まとめる力
- ・【代替思考力】課題の問題点や物事の本質を捉え直す力
- ・【企画創造力】周囲の状況や動向を予測しながら、みんなのためになる活動を創り出す力
- ・【主体的実践力】内容や活動を調整しながら率先して行動する力
- ・【コミュニケーション力】情報を受信したり、発信したりしながら、様々な考えや意見を認め合い、人やものとの関係を広げる力
- ・【コラボレーション力】進んで協力し合いながら、互いの目的を達成する力

これらのアビリティを主としてグローバル人材育成科において育成するとともに、各教科においてもアビリティ育成の視点をもって学習指導を行い、以下の5点について明確にすることを目的とした。

- ・「グローバル人材育成科」と「各教科」の指導内容や指導方法について
- ・「グローバル人材育成科」におけるアビリティの評価について
- ・アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価について
- ・研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価について
- ・教育課程の年間指導計画及び学習指導要領の作成について

##### 3. 1. 4 アビリティと『スキル』

アビリティを育成するにあたり、アビリティ育成の素地となる技能や能力、姿勢、態度を設定し、それらを『スキル』と名付けた（表1）。アビリティ育成の素地となる『スキル』の向上を重視し、アビリティを育成する。

表1 アビリティとスキルの関係

アビリティ	『スキル』	『スキル』の具体
情報統合力	情報収集	調べる, 記録する, 取材する, 問題点を把握する
	情報整理	比較する, 分類する, 分析する, 優先順位を付ける
代替思考力	思考拡散	アイデアを出す, アレンジする, 代案を出す
	比較検討	視点を設定する, 吟味する
	思考収束	ひとつにまとめる, 折り合いを付ける
企画創造力	目標設定	ゴールをイメージする, 不安要素を明らかにする
	手段構築	役割分担する, 日程を調整する, 計画を立てる
主体的実践力	渉外調整	外部の人と目標・手段を共有する
	準備試行	リハーサルする, 試作する, シミュレーションする
	役割遂行	自分の役割を果たす, 進んで行動する
コミュニケーション力	相互理解	受容する, 認め合う, 互いの立場で目的を理解する
	即応思考	アドリブで対応する, 相手の様子に応じて話す
		相手を乗せる
	情報運用	機器や資料を使いこなす
		よりよいプレゼンテーション方法を検討する
	礼儀作法	時と場に応じた挨拶や言葉遣いをする
		謙虚に相手の話を聞く
コラボレーション力	協働創造	協力して新しいものを創り上げる
	互惠行動	互いの利益を生むために行動する

(濁川作成)

### 3. 1. 5 教育課程の構造

#### ①グローバル人材育成科と各教科等の時数

グローバル人材育成科は, 「課題討論の時間」「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」の3つの時間からなる。時数は表2の通りである。

表2 グローバル人材育成科の時数

	グローバル人材育成科			
	課題討論の時間	企画創造の時間	グローバルコミュニケーションの時間	計
第1学年	35	35	70	140
第2学年	35	35	105	175
第3学年	50	35	100	95
計	120	105	275	500

(濁川作成)

また, グローバル人材育成科の創設に伴い, 総合的な学習の時間を廃し, 各教科の時数については, 表3の通り変更した。

表3 各教科等の時数

	各教科										
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語	道徳	特別活動
第1学年	135	35	140	105	45	45	105	70	120	35	35
第2学年	130	35	105	135	35	35	105	70	120	35	35
第3学年	95	35	140	130	35	35	105	35	120	35	35
計	360	105	385	370	115	115	315	175	360	105	105

(濁川作成)

グローバル人材育成科、各教科、特別活動の総授業時数は、標準時数3045時間に対して、3240時間に設定した。

## ②グローバル人材育成科

グローバル人材育成科では、アビリティをその類似した特性により2つずつにまとめることで、生徒もアビリティを意識でき、より効果的に育成できると捉え、「課題討論の時間」、「企画創造の時間」、「グローバルコミュニケーションの時間」に配分した。ただし、配分したアビリティのみを育成するのではなく、主に育成するという捉えである。

「課題討論の時間」は、主として【情報統合力】、【代替思考力】の育成の場であり、「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」における活動を振り返り、課題の改善に向けて具体的方策を練り上げる。また、現代、近未来における喫緊の課題を取り上げ、実践的討論の技能や討論に臨む姿勢や態度の向上を目指して活動に取り組む。

「企画創造の時間」は、主として【企画創造力】、【主体的実践力】の育成の場であり、生徒の日常活動や生徒会活動、「グローバルコミュニケーションの時間」の活動について企画立案し、活動に向けた準備や試行を行う。また、活動を造り上げていく喜び、主体的に取り組むことの大切さについて学んでいく。

「グローバルコミュニケーションの時間」は、主として【コミュニケーション力】、【コラボレーション力】を育成する場である。また、アビリティ育成の素地となる『スキル』を向上する場であり、アビリティを高める場である。様々な体験活動を通して、多様な他者と関わりを広げ、これからの社会の在り方、自分の在るべき姿について考えを深めていく。

この3つの時間で展開する3年間のシラバスを10のステージに分け、それぞれのステージに学びのテーマと『スキル』向上コンテンツを設定する。『スキル』向上コンテンツは、それぞれのステージで習得した知識や技能を活用する実践場面となるように、これまでの実践してきた学校行事や生徒会活動などの特別活動をアビリティ育成の視点で捉え直し、配置したものである。それぞれのステージに身に付けた知識や技能をどのように使って課題に迫るのか、向上した『スキル』を背景としながらどのように判断、表現するのか、生徒がコミュニケーション力とコラボレーション力を駆使して最大限のパフォーマンスを発揮できるようなコンテンツを構想し、新規の活動も積極的に取り入れる。

各ステージの3つの時間では、学びの成果が最終的に『スキル』向上コンテンツに向かうように、『スキル』向上トレーニングとして、テーマに基づいた学習活動を展開する。それぞれの時間で向上させる『スキル』を明確にし、生徒の知っていること、できることを着実に増やししながら、学習が単発的・形式的なものとならぬよう、発達段階に応じて量や質を調整する。また、『スキル』向上コンテンツを意識した例題やシミュレーションに取り組む。

## ③各教科等

各教科では、学習事項習得のための各教科の学習活動が、アビリティ育成の素地となる『スキル』とどのように関連しているのかを明確にし、その『スキル』の向上を意識して指導に当たる。教師が『スキル』の向上を意識することで、これまで以上に多くの生徒が各教科の目標や単元・題材のねらいの達成に迫ることができると考える。ただし、各教科において、学習活動とすべての『スキル』と関連させるというのではなく、その単元・題材で最も学習効果が期待される活動に焦点を当てることとする。さらに、年間活動計画の学習活動に『スキル』を位置付け、全教科における各『スキル』の位置付けの状況分析、生徒の『スキル』の実態分析を通して、不足しているまたは、一層向上させる必要がある『スキル』を、グローバル人材育成科において積極的に補っていく。

### 3. 1. 6 教育課程の評価

教育課程の評価は次の4点について実施する。

- ①グローバル人材育成科におけるアビリティの評価
- ②各教科における学習事項の観点別評価
- ③アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価

④研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価

以下，説明する。

①グローバル人材育成科におけるアビリティの評価

アビリティの評価では，ルーブリックを活用する。アビリティが育成できたかどうかの視点ではなく，学習活動に対してどの程度，アビリティが発揮されているのかという視点で評価を行う。なお，生徒には教師が設定したAの姿に満足させるのではなく，Aの上をいく具体的なSの姿を議論させ，設定させ，Sを目指すさせる。

②各教科における学習事項の観点別評価

各教科においては，学習指導要領に基づいた観点別評価を行う。各教科の学習活動に関連するアビリティについては，評価を実施しない。

③アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価

生徒一人一人のアビリティ育成の素地となる『スキル』がどの程度，定着しているのかについて，筆答検査によって評価を行う。この筆答検査をパフォーマンステストAと名付けた。解答した文章から，記述した各『スキル』の有無を，教師が対応表と照らし合わせて点数化し，生徒一人一人の状況を把握する。定期的に生徒の定着の状況変化を追ひ，グローバル人材育成科，各教科における育成の手立てについて分析，考察する。

④研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価

研究主題「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」に迫ることができたかどうかを真に評価するには，将来の生徒の姿を追う必要がある。本研究では，その代案として，次の4つの視点から評価を行う。

1)「持続可能な社会」に関する正しい理解が得られているか

持続不可能にする要因とは何か，または根拠が明確な解釈ができていのかどうかについて検査を行い，分析する。ただし，各学年の発達段階や既習事項と照らし合わせ，【問い】を設定する。

2)アビリティが育成されているか

「持続可能な社会を創造すること」，「自己を確立すること」を「アビリティをあらゆる場面で発揮すること」と捉え，パフォーマンステストに取り組みさせる。これをパフォーマンステストBと名付けた。パフォーマンステストAの筆答検査とは異なり，実際に課題解決に向けて取り組んだ活動を記述させる。教師が対応表と照らし合わせながら，どのような『スキル』を記述したかを読み取り，点数化してアビリティの発揮状況を評価する。

3)生徒，保護者の教育課程に対する意識はどのようになっているか

学校評価による生徒・保護者の教育への意識調査を行い，これからの社会を生きる生徒にとって，教育課程が効果的であると捉えているかについて，マークシート・5件法を用いて分析する。

4)教育課程が学力にどのような影響を与えているか

標準学力検査教研式NRT，標準学力検査教研式CRT，学習適応性検査(AAI)等で学力の経年変化を追ひ，教育課程が学力を向上させるために有効であるかどうかについて分析する。

3. 2 2017年度の取り組み

3. 2. 1 2017年度の概要

2017年度は，ルーブリックの運用を進め，改善を図っている。例えば，S目標については，回数を重ねることで修正や追加の質や量に改善が見られている（表4）。

表4 ルーブリックの運用の実査（S目標）

修正前のS目標	修正し追加したS目標
プレゼンテーションで良さを伝えとともに，工夫をしながらもっと良い発表を作る。	プレゼンテーションで良さを伝えとともに， <del>工夫をしながらもっと良い発表を作る。</del> 発表内容が相手に伝わりやすいように，簡単な言葉に直して，聞きやすくなるようにする。（修正）
アイデアの売りを伝えて，平坦なプレゼンテーションにならないようにする。	アイデアの売りを伝えて，平坦なプレゼンテーションにならないようにする。資料を使って，具体的に，自信を持って発信する。（追加）

（鴨井作成）

こうしたルーブリックでは単なる『スキル』の質的・量的な向上を目指しがちだが，本研究では，生徒の目標設定が次第に，『スキル』の向上を通して，どのような自分になりたいか，周囲とどう関わりたいか，と変化している。それは，このルーブリックが単なる評価ツールではなく，生徒がより良い学びをするためのガイドラインとして機能

していることを示唆している。

一方で、全校生徒が「一人一台」の環境でタブレット端末を運用できる環境が整ったこともあり、各時間の学びを蓄積するポートフォリオをタブレット端末で運用することとした。画像・情報共有アプリ<sup>7)</sup>を導入し、各授業の時間の中で印象に残った場面や活動、そこで得た気付きや感想、次時への課題などを、テキストだけでなく、写真や音声、動画などを含めた任意の方法で記録している。鈴木（2012）はポートフォリオの構築について、「制限性」の重要性を指摘しているが、本研究でもこの記録は授業の終末（3分間程度）に行い、限られた時間の中で自分が表現したいことの本質を見極める姿を期待している。

### 3. 2. 2 各教科

学習活動を工夫することで、『スキル』の向上、つまりアビリティ育成が、教科指導の中でもできるという仮説を立てている。まず、これまでの学習活動と『スキル』の関連を検討、確認し、一覧表を作成した（表5）。

現在はこの関連を手掛かりに『スキル』の向上を視点に授業改善を行い、より教科本来のねらいに迫れるように実践を進めている。

### 3. 2. 3 教育課程の評価

期待する資質・能力が育成されているかを評価するために、パフォーマンステストA・Bの2種類を行っている。

西岡（2015）が指摘するような「包括的な『本質的な問い』」を3年間で、3つ設定している。以下は、3年生のパフォーマンステストの例である。

表5 学習活動とスキルの関係

アビリティ	『スキル』	国	社	数	理	音	美	体	技家	英	道
情報統合力	情報収集		●	●	●	●	●	●	●		
	情報整理	●	●	●	●		●	●		●	●
代替思考力	思考拡散		●	●	●		●	●	●		
	比較検討	●		●	●		●	●		●	●
	思考収束	●	●		●		●	●		●	●
企画創造力	目標設定			●			●		●		
	手段構築			●		●	●		●		
主体的実践力	渉外調整										
	準備試行			●				●		●	
	役割遂行			●				●	●	●	●
コミュニケーション力	相互理解		●					●		●	●
	即応思考	●			●	●		●		●	
	情報運用	●			●						
	礼儀作法	●						●			●
コラボレーション力	協働創造										
	互恵行動										

（鴨井作成）

中学生を対象とした「起業コンペ」に応募します。優勝者には、資金300万円が7年後、22歳の春に贈られます。審査内容は、①その会社を起業する理由、②300万円の使い方です。5分間のプレゼン内容を考えて、実際に発表してください。

この問いに対して、行動計画を個人で筆答するAを2回行った後（7月、12月）、実際にグループで計画を立てて行動するB（2月）というように、同じ課題に対して3回のテストを実施している。そこで抽出生徒について、表出された『スキル』を記録し、3回の中での変容を評価した。石森（2013）は、いわゆるグローバル教育の実践における課題として、「実践が表層的・断片的になりやすい」「評価・アセスメントが機能していない」と指摘している。特に後者については、まだ先行研究も少なく、本実践で進めているパフォーマンステストの採点方法やその分析方法については、不十分な面も多い。より提案性のある実践を目指していく。

## 4 研究のまとめと今後の課題

### 4. 1 2015・2016年度の研究

#### 4. 1. 1 研究開発の経緯

上越教育大学附属中学校は、2015年度からの教育課程の開発研究に先立ち、教員間で未来の社会で活躍できる人間像について共通理解を図っている。具体的には「これからの社会を創造する」「歩むべき正しい道を自ら切り拓く」ことができる人材育成を旨と設定した。その上で、中学校段階で育成すべき、あるいは育成可能な資質・能力を設定した。その資質・能力の設定にあたっては、これまでの上越教育大学附属中学校の研究経緯と時代や社会の要請、各種先行研究、関係の報告書等の内容を踏まえて、生徒の実態、保護者の理解を大切にしながら設定した。特筆すべきことは、管理職のトップダウンや一部の教員のリーダーシップで、研究の基盤や人間像、資質・能力を設定するのではなく、あくまでも教員集団の内発的教育改革の意欲を尊重しつつ合意形成を図っていることである。この手続きは、上越教育大学附属中学校の教育研究の基盤であり、教育課程研究としては必要不可欠な手続きでもある。

#### 4. 1. 2 アビリティとスキル

上越教育大学附属中学校は、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を「グローバル人材」として、このような生徒を育成する要の時間として「グローバル人材育成科」を創設した。さらに、これからの社会で求められるとして、アビリティを設定した。具体的には、【情報統合力】【代替思考力】【企画創造力】【主体的実践力】【コミュニケーション力】【コラボレーション力】の6つである。これらアビリティは、ESDで育成が求められている能力態度をすべて包含するとした。このことは教育課程研究の構造上、極めて大切なことである。つまり、持続可能な社会を創造できる人材は、6つのアビリティを身に付け、自己を確立できると明示したのである。

また、アビリティを育成するに当たり、アビリティの素地となる「スキル」を設定した。スキルは、アビリティの素地となる技能や能力、姿勢、態度を意味するとした。

#### 4. 1. 3 グローバル人材育成科の構造

上越教育大学附属中学校は、6つのアビリティを育成し、評価するために教育課程に「グローバル人材育成科」を創設した。グローバル人材育成科は、「課題討論の時間」「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」で構成される。ここで、注目すべきことは、グローバル人材育成科では、アビリティを類似した特性で2つずつにまとめて運用したことである。つまり、アビリティとグローバル人材育成科の関係では、資質・能力は分断するのではなく、関連する資質・能力は統合して学習活動を設計しようとする意図がうかがえる。

#### 4. 2 現在の取組

2017年度は、前年度までに策定した教育課程の評価計画に基づき、グローバル人材育成科と各教科等で評価活動の充実に務めている。ループリックの運用を進め、改善を図っている。例えば、S目標については、回数を重ねることによって修正や追加の質や量に改善が見られている。また、ループリックが単なる評価ツールではなく、生徒がより良い学びをするためのガイドラインとして機能するように務めている。一方で、パフォーマンステストの採点方法やその分析方法については、不十分な面があると認識し、より提案性のある実践を目指している。

#### 4. 3 総括

以上、上越教育大学附属中学校の2015年度から2017年度の取組を概観してきた、簡潔にまとめると、次の5点に集約できる。

- ①時代や社会の要請を的確にとらえ、上越教育大学附属中学校の研究の潮流を踏まえ研究開発に着手した。
- ②「これからの社会を創造する人材」「歩むべき正しい道を自ら切り拓く人材」の育成を目ざした。
- ③関係法令や各種先行研究を参考にして、6つの資質・能力（アビリティ）を設定した。
- ④グローバル人材育成科を教育課程に位置付け、6つのアビリティを育成・評価する要の時間とした。
- ⑤現在（2017年度）は、6つのアビリティの評価システムを構築し、その運用に努めている。

6つのアビリティの設定経緯については、周到的準備と教員集団の激しい議論があったことが確認できる。また、そうした努力があったからこそ、数年に渡る教育課程の開発研究が継続できる所以であろう。

#### 4. 4 今後の課題

課題として、次の3点を指摘する。

- ①6つのアビリティについて、各教科等で育まれたアビリティとグローバル人材育成科で確認されたアビリティの往還関係を明らかにすること。
- ②教育課程研究として、その評価システムの開発が急務である。上越教育大学附属中学校では、ループリックの開発に取り組み、一定の成果をあげているが、パフォーマンステストの採点方法やその分析方法については、不十分な面があり、喫緊に解決すべき課題である。
- ③資質・能力の育成を目ざした教育課程の研究開発過程は上越教育大学附属中学校の歴史と伝統、学校文化によることが大きいことは否めない。しかし、教員集団の内発的な教育改革のエネルギーは注目に値する。今後、教育課程の開発に関する教員の力量形成について明らかにすることが急務である。

## 注

- 1) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm) (2017.9.10取得)
- 2) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/___icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf) (2017.9.10取得)
- 3) 同上
- 4) 例えば、次の先行研究がある。
  - ・釜田聡「中学校における各教科等と関連を図った「総合的な学習」についての意識調査－上越教育大学附属中学校教員へのアンケート調査から－」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学VOL.25 NO.1, pp.243-254, 2005
  - ・釜田聡「各教科等の関連を図った「総合的な学習」のカリキュラム開発の可能性と課題」pp.178-194  
『日本学校教育学会創立20周年記念論文集学校教育の「理論知」と「実践知」』教育研究開発所（全289頁），2008
  - ・小出信也・濁川朋也・中野博史・釜田聡「知識基盤社会を主体的に生き抜く資質・能力と教育課程」  
上越教育大学研究紀要 36(1) pp.63-72 2016年9月  
本研究では、これらの研究成果を継承するものである。
- 5) 濁川：2015年度の研究主任であり、研究開発の中核であった。  
鴨井：2017年度の研究主任であり、現在、教育課程の評価システムの構築に取り組んでいる。  
釜田：上越教育大学附属中学校の研究の全体指導者。
- 6) 6つの資質・能力をアビリティと名付け、「持続可能な社会を創造すること」「自己を確立すること」と「アビリティをあらゆる場面で発揮すること」を同義とした。
- 7) ロイロノート・スクール (<https://n.loilo.tv/ja/>) カードにテキスト、画像、動画などを記述し、リスト化することができる。

## 引用・参考文献

- ①「社会の期待に応える教育改革の推進」文部科学省 2012年6月
- ②「外交白書2015」外務省 2015
- ③「Living Planet Report 2014」WWFジャパ 2014
- ④「平成26年度文部科学白書 第10章国際交流・協力の充実」文部科学省 2015
- ⑤「教育課程企画特別部会論点整理」文部科学省 2015年6月
- ⑥「第二期教育振興基本計画」文部科学省 2012年6月
- ⑦「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書7 資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」国立教育政策研究所 2014年3月
- ⑧「21世紀の学習活動をデザインするための学習活動ルーブリック」Microsoft Educator Network 2014年7月
- ⑨「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」日本ユネスコ国内委員会小委員会ESD特別分科会 2015年8月
- ⑩「ESDの国際的な潮流」国立教育政策研究所 2012年12月
- ⑪鈴木敏恵「課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法」教育出版 2012
- ⑫西岡加名恵「パフォーマンス課題を活かした授業づくり（特集 これから求められる資質・能力と授業づくり）」  
教育展望 61(3) pp.27-31 教育調査研究所 2015
- ⑬石森広美「グローバル教育の授業設計とアセスメント」学事出版 2013
- ⑭小出信也・濁川朋也・中野博史・釜田聡「知識基盤社会を主体的に生き抜く資質・能力と教育課程」上越教育大学研究紀要 36(1) pp.63-72 2016年9月
- ⑮研究代表者勝野頼彦「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」2013
- ⑯釜田聡「中学校における各教科等と関連を図った「総合的な学習」についての意識調査－上越教育大学附属中学校教員へのアンケート調査から－」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学VOL.25 NO.1, pp.243-254, 2005
- ⑰釜田聡「各教科等の関連を図った「総合的な学習」のカリキュラム開発の可能性と課題」pp.178-194  
『日本学校教育学会創立20周年記念論文集学校教育の「理論知」と「実践知」』教育研究開発所（全289頁），2008

# The development process of a curriculum designed to develop qualities and abilities

– With a focus on the research and development case of Junior High School Joetsu University of Education –

Zyuichi KAMOI\* · Tomoya NIGORIKAWA\*\* · Satoshi KAMADA\*\*\*

## ABSTRACT

This research is intended to organize the development processes of a curriculum designed to develop qualities and abilities of junior high school students by extracting essential points with a focus on the research and development of the curriculum that Junior High School Joetsu University of Education has been implementing since fiscal 2015.

In this research, we organized the relationships between the genealogy of curriculum development and the research and development of the curriculum from fiscal 2015 to fiscal 2017 in Junior High School Joetsu University of Education. As a result, we clarified that the following procedure was followed for the research and development of the curriculum:

1. Understanding the requests of the age and society precisely and positioning them in the research genealogy of Junior High School Joetsu University of Education to launch research and development.
2. Aiming to develop “human resources who can create and develop future society” and “human resources who can cultivate the right path for themselves.”
3. Setting up six qualities and abilities with reference to related laws and previous research results.
4. Establishing the global human resources development course as part of the curriculum and designating an essential period to develop and evaluate the six abilities.
5. Constructing a system to evaluate the six abilities, which is currently being operationalized in fiscal 2017.

For each of the six abilities, we specified clarifying the relationship between the ability developed in individual subjects and the ability confirmed in the global human resources development course as a task.

---

\* Junior High School Joetsu University of Education    \*\* JOHOKU Secondary School    \*\*\* School Education